

講演後記

12月初旬、岩手県で講演を行った。講演で地方に出かけるときの楽しみがある。それは“寄り道”、“道草を食う”ことである。その町に酒造店があれば、酒造りの現場を見せていただき、古い醤油店があれば、その現場をのぞく。かつて調査でお世話になった地銀や信金があれば、立ち寄って、旧交(?)をあたためる。

今回も、寄り道するつもりで予定を組んでいたが、あいにく風邪で体調を崩したために、それは果たせなくなった。「今回は講演だけで帰るか」と思いながら盛岡駅で降りた。待ち合わせまで20分ほど時間がある。いつもの癖で、駅構内を「何か面白いものはないか」と“駅ブラ”した。県の物産展示コーナーがある。覗いてみると、小岩井農場の乳製品が陳列されている。チーズもある。カマンベール、ゴーダなど馴染みのチーズが並ぶ。「えっ、パルミジャーノ・レジャーノがあった。小岩井農場でもパルミジャーノ・レジャーノを作っているのか。帰りに買っていこう。チーズのなかで二番目のお気に入りのものだ。

お隣は地酒コーナーだ。その多くは聞いたことがあるものだが、なかには知らない銘柄もある。近づいて、酒のうたい文句を読む。「ん!」、「幻の『亀の尾』で造った逸品」、「幻の『ぎんおとめ』の銘酒」、「珍しい酒米『愛山』で造った岩手の酒」。『山田錦』ではない酒米で造られる酒が岩手には多いなあ。しかも、うたい文句には“幻の…”とある。嬉しかった。こういうことを発見しただけでも来た甲斐があった。

その夜は信連の方との懇親があった。その宴席で岩手の酒米のことを尋ねたが、意外にも地元の人もそういう酒米で造られた酒があることを知らなかった。「鈴木さん、明日の講演のアタマはそれでやってくれ」。本当に楽しそうな表情でA専務が何度も念押しをする。

翌朝(講演当日)、明け方前から目が覚めた。講演内容のおさらいをするにはちょうどよい。それにしてもアタマをどうするか。「そうだ。A専務に貸しを作ろう(専務、ごめんなさい)」。朝からお酒の話もどうかと思いつつ…、私は決断した。

そもそも、今回の講演のアタマは美しい話を用意していた。私と岩手との縁についてである。37年前、私は卒論のテーマで岩手県沢内村長瀬野地区の集落再編成を取り上げた。そして、1年間、春、夏、冬と山深い沢内村に通った。冬は2メートルの豪雪のなか、農家を1軒1軒回って、村人から昔話から今に至るまでのことをじっくりとうかがった。工業大学でそんなテーマを卒論にする学生も珍しいが、なぜか先生が認めてくれた。私が農林関係の職に就いたのは、その経験が契機である。

“美しい話”で始まる予定であった講演は“お酒の話”で始まることとなった。

しかし、結果は成功したようだ。お酒の話を始めるやいなや、会場の人々の視線が私に集中したのを感じた。私はA専務に“貸し”ではなく、“借り”ができてしまった。

(取締役調査第一部長 鈴木利徳)